

## 第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

### 報告書資料 一般-09

学校名・団体名	那珂市立芳野小学校
HPアドレス	<a href="http://academic1.plala.or.jp/yosinos/">http://academic1.plala.or.jp/yosinos/</a>
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	どの子ども輝く！ 児童の意欲を高める言語活動の推進
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>児童が自主的に、詩作や百人一首に取り組む環境を整えることにより、児童一人一人の言語活動への意欲を高める。</p> <p>詩作では、各家庭に帰ってから、その月（児童によってはその日）を振り返り、一番心に残ったことを書き記す。それを評価・添削・返却するサイクルを通して、児童は、物事の捉え方、感じ方を伸ばしていく。</p> <p>百人一首暗記では、休み時間に暗記認定を行い、合格する毎に全校朝会で表彰する。また、定期的に大会を開催することにより、暗記することへの意欲付けを図り、古典のリズムや語感に慣れ親しむことねらっている。</p> <p>児童が自主的に、詩作や百人一首に取り組む環境を整えることにより、児童一人一人の言語活動への意欲を高める。</p>	

1 研究主題 どの子ども輝く！ 児童の意欲を高める言語活動の推進

2 時 期 平成 27 年 5 月～平成 28 年 3 月

3 研究内容

(1) ねらい

- 毎月、全校児童で詩作を行い、それらを言語活動推進啓発通信「ことのは通信」に掲載していくことで、自ら感じる心、考える力、表現する力、書こうとする意欲を高めていく。
- 校内百人一首大会を軸として、日常的に百人一首の暗記等を行うことにより、日本古来の言葉の響きやリズムに気づき楽しめるようにする。また、暗記認定証や大会で入賞・参加賞を通して、児童の学習意欲の向上につなげる。

(2) 研究の経過

- 4 月 ・児童の実態把握を基に、研究の具体的な内容の検討と実施計画の立案を行い、教職員との共通理解を図る。
- 5 月 ・学校の方針、目標、取組を「ことのは通信」に掲載し、保護者への周知を図る。  
・各クラスで詩作の授業を行うとともに、「ことのは通信」に優れた詩作品とその評を掲載して配付する。
- 6 月 ・毎月全児童に詩作を促し、「月間賞」で表彰するとともに、校内掲示板に掲示する。また、「ことのは通信」に作品及びその評を掲載して全家庭及び地域に配付する。さらに、毎月詩作品を新聞（読売新聞、茨城新聞、朝日小学生新聞、ひばり等）に応募する。
- 8 月 ・詩作品の添削や評価の仕方について、教職員の校内研修を実施する。  
・百人一首の取組、評価方法について、教職員の校内研修を実施する。
- 10 月 ・全児童及び保護者に百人一首大会の実施を周知する。
- 11 月 ・百人一首暗記認定を開始する。（百人一首を 20 首暗記するごとに認定証を発行する。）
- 12 月 ・第 1 回校内百人一首大会（赤札）を開催する。【1～6 位を 4 年生が席卷する。】
- 2 月 ・那珂市立木崎小学校（同じ中学校区の小学校）と対戦する百人一首大会を開催して交流を図る。（高学年）  
・第 2 回校内百人一首大会（黄札）を開催する。【1 位 5 年生、2 位 6 年生、3 位 4 年生、4 位 1 年生、5 位 2 年生、6 位 3 年生】
- 3 月 ・第 17 回五色百人一首茨城県大会に、11 名の児童が参加し、黄札で 1 位と 3 位に輝いた。

(3) 成果

- ① その月にあった出来事や思いを「書く」ことを通して、「考える生活」を促すことができた。その都度、詩作品としての評価をきちんとすることにより、児童の表現力は確実に高まった。また、毎月、優れた児童の作品を、本校オリジナルの原稿用紙に清書させた。これにより、読んでもらう文字を書く意識付けを図ることができた。提出された作品の中から毎月、「〇月の詩月間賞」作品を選んで表彰したほか、積極的に新聞社等（読売新聞「こどもの詩」、朝日小学生新聞「ぼくとわたしの作品」、茨城新聞「詩壇」、JAバンク茨城「ひばり」等）に応募した。3 月 6 日現在で 50 作品が掲載された。これらは全て、廊下に貼りだして、児童の意欲付けを図った。
- ② 校内五色百人一首大会を 2 回（第 1 回参加者 92 人、第 2 回大会参加者 121 人）、小小交流の五色百人一首大会（参加者 81 人）を 1 回、開催することにより、それに向けて児童が楽しみながら百人一首の暗記に取り組むことができた。購入した畳の上で本格的な対戦を行うことにより、児童の意欲は向上した。更に百人一首上の句を廊下に掲示し、啓発を図った。また、20 首暗記するごとに「認定証」を発行するほか、「校内百人一首大会優勝」等の賞状も作り、全校児童の前で表彰することにより意欲を持続することができた。延べ 40 人が認定証を受けた。また、3 月 5 日に開催された第 17 回五色百人一首茨城県大会に 11 名が参加して、1 位と 3 位に輝いた。
- ③ 言語活動推進啓発通信『ことのは』（3 月 7 日現在で 32 号発行）を通して、詩の月間賞作品や新聞等に掲載された作品、校内百人一首大会の結果等を、保護者はもとより地域への周知も図った。これにより、本校の取組への地域の理解が一段と高まった。

(4) 課題

- ① 子どもたちの書く意欲を持続させるのは、日々評価して返す各担任の力に依るところが大きい。日々適切に児童の作品を評価した分だけ、子どもの成長が見られる。じっくりと児童の詩と向き合う時間の確保ができるような支援を検討していく必要がある。
- ② 百人一首の取組では、二極化が起こってきた。得意な子たちの力が突出し、苦手な子たちが太刀打ちできない状態である。それぞれに目標を持たせ、全校で高め合っていくために、校内大会の方法にも今後工夫を加えていく必要がある。
- ③ 「書く」そして「豊かな言語感覚」を養うことについては、ある程度の力を付けることができた。それを、いかに「伝える」か、ということにまで指導が行き届かないでしまった。声に出して思いを伝える力を、今後、日常的にどう扱い、系統的に高めていくかが、これからの課題である。